

氏名(国籍)	い 李	じょん 延	み 美	(韓 国)
学位の種類	博 士 (デザイン学)			
学位記番号	博 甲 第 3253 号			
学位授与年月日	平成 15 年 3 月 25 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
審査研究科	芸術学研究科			
学位論文題目	A Study on the Planning of Spatial Composition and the Allocation of Children's Section in Public Libraries 公共図書館における児童部門の配置と空間構成に関する研究			
主 査	筑波大学教授	工学博士	富 江 伸 治	
副 査	筑波大学教授	工学博士	安 藤 邦 廣	
副 査	筑波大学講師	博士(工学)	花 里 俊 廣	
副 査	大阪芸術大学教授	工学博士	中 村 恭 三	

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

本研究は、公共図書館の児童部門における利用形態について、建築計画の視点から、成人部門等との配置型(位置関係)による利用の特性、平面構成やスペースの設け方など、計画に資する知見およびデータを得るとともに、計画・設計の方法について論じたものである。

近年の日本の公共図書館の普及・発展過程において、利用は増大し、館内において長時間読書や調べものをする利用形態が増えてきた。そのような状況のなかで、著者は、子どもを同伴した家族利用が増加してきたことに着目し、公共図書館の平面計画の骨格を決める重要な要素とされながら未だ明確な判断が示されていない課題、すなわち児童部門と成人部門等との配置型の在り方を中心に計画論を展開したものである。

論文は6章からなり、最後に資料が添えられている。

「第1章 序論」では研究全体の枠組み等を示している。研究の背景として、児童サービスの変遷を概観し、近年における公共図書館の規模の拡大傾向や、来館利用における変化、とりわけ子どもの利用形態および家族利用の増加傾向について述べたうえで、家族中心の来館利用の増加に着目し、それに対応して児童部門と成人部門等其他部門との配置型(位置関係)やスペース的に対応が求められている課題を設定している。それにもとづいて研究の目的を、児童部門の利用状況を詳細に捉え、それらを基に児童部門の位置関係やスペースの計画・設計の方法に関する考察を行い、計画の示唆となるデータ等を示すこととしている。研究の方法は、大・中規模の公共図書館のうちから、児童部門と成人部門等との配置型から典型となる5事例、すなわち中規模館で「近接型1」として阿見町立図書館、「近接型2」つくば市立図書館、「独立型」守谷町立図書館の3館、大規模間で「一般分離型」として品川区立図書館、「完全独立型」市川市立中央図書館の2館を取り上げ、それぞれについて「来館者アンケート調査」「スペース占有調査」「行動追跡観察調査」の3つの調査を行い、それらを基に分析・考察を行うことを記している。

「第2章 子どもの来館利用の全体像と家族利用の割合」では、まず、調査対象館の配置型の分類と選定方法、各対象館の平面構成および図書館並びに設置自治体の概要について記している。そして主に「来館者アンケート調査」の結果をもとに、各館の来館者利用の全体像として、来館者数、時刻別在館者数、在館時間、館内行為、家族利用の割合および家族の同伴人数とその内訳等を明らかにしている。ここではまた、ピーク時の在館者の集中

率などを示すとともに、立地条件等による各館別の相違についても比較して論じている。

「第3章 スペースの占有状況と滞留場所」では、主に「スペース占有調査」をもとに、図書館内の各部門における来館者のスペースの占有状況すなわち滞留している場所の分布と座席の占有状況について明らかにしている。また、児童部門における子ども以外の青少年・成人が占める滞留者人数の割合、閲覧スペースの占有率、ピーク時の占有密度等も示している。結果として、子どもの滞留場所は児童部門名成人部門から独立性が高くなるほど児童部門に限られ、両部門が接するほど児童部門以外の他部門へ広がる傾向があることなどを明らかにしている。また、児童部門には子ども以外に付き添う親などの成人の割合が25～40%を占めており、図書館の規模が大きくなるほどその割合が多くなることを示している。

「第4章 児童部門の配置型別にみた家族利用の型とその特性」においては、「行動追跡観察調査」から各館における子どもの年齢別にみた家族の同伴利用の型をモデル化し、児童部門の配置型別の比較を通して各モデルの特性を明らかにするとともに、家族同伴による利用行為に影響を与える要因について考察している。ここでは、親子の同伴利用型は大きく「付添い利用型」「個別利用型」に分けられ、さらに親子の相互付添いによる移動場所の順序と、親子の分離または集まる行為が行われる時点や生起頻度によってそれぞれをさらに細分類している。これらのモデル化を通して、館内で親子が分離・集まる行為の状況を説明し、一般的に「付添い利用型」が多いが、児童部門の独創性が高いほどそれがより多くなり、児童部門が成人部門等に近接しているほど親の両部門間の往来が増え、子どもの他部門への接近行為も増えるなどを明らかにしている。

「第5章 児童部門における家族の『集まる場所』」では、館内で家族の「集まる場所」にはどのように分布しているのかを児童部門の配置型別に把握するとともに、特に児童部門における「集まる場所」の分布およびそれらの場所を選択する頻度や場所の移動などから、「集まる場所」の選択行為のモデル化を試みている。ここでは、家族が集まるための物理的環境の手がかりに依ってスペースを利用する場合と、物理的環境に働きかけて集まる場所を作り出す場合があることを示している。さらに、子どもが居場所を確保する手がかりとして物理的要素の遊具的利用とプライバシー確保のための選択があることも明らかにしている。さらに、閲覧スペースで家族がさまざまな形で着座し、親子がそれぞれ読書をしたり、相互に交わす会話や読み聞かせ行為、子どもが自分の居場所を確保しながら家族の集まる場所を共有する行為などについて、典型となる具体的な態様を整理・分類して提示し、スペースの設け方や座席の形および配置等について計画・設計時に具体的に有用なデータを提示している。

「第6章 公共図書館における児童部門の配置と空間構成に関する計画手法への展開」は、本論文の結論に当たる章であり、各章での結果を総括して計画論の視点からまとめている。本論文で明らかにした点として、来館利用の全体像、子どもの家族同伴利用から見た児童部門の利用実態などについて数値データを提示したこと、そのうえで家族の同伴利用型をモデル化して示し、各館での児童部門の配置型との比較を通して各モデルの利用特性について計画上の指針となるようにまとめたこと、児童部門での家族の「集まる場所」に関して、着座利用等の状況を場面としてとらえ、家族が集まる場所が選択される手がかりとしての空間特性について論じたこと、などとしている。結論の一つとして「集まる場所」の選択行為の特性等から、児童部門の閲覧スペースのレイアウトや形態に対し、適切な大きさのスペースの分節と多様な形態の分散配置などの有効性を指摘している。最後に、計画論からみた総括として児童部門での子どもの行為における家族利用の意味について論じ、児童部門の配置型別の計画上の考え方を示している。

なお巻末に、[参照表・図]、資料として「スペース占有調査分布図」「アンケート調査票」「スペース占有調査票」「行動追跡観察調査票」を添付している。

## 審査の結果の要旨

公共図書館計画において館内スペースの計画・設計に関し、来館者の行動等に基づいた実証的な研究は未だ少ない。本研究はこの問題に積極的に取り組んだものであり、まずその意欲は多とされる。研究の目的は明確で、子どもの来館利用の変化のなかで特に家族同伴利用が増加していることに着目したことはユニークで的確な着眼点であったといえる。研究方法として用いた3つの調査手法は、それぞれ明らかにすべき対象・目的に的確なものであり、各結果および総合的な考察から多くの有用な知見を得ている。

著者は、図書館の発展についてこれまで強い関心を有し、明確な問題意識を持って終始熱心に研究に取り組んできた。特に繰り返し行った予備調査の結果をもとに本調査では精緻な内容の調査計画を立て、アンケート、ヒヤリングならびに観察を綿密に行ったことによって、多様な様相を呈す館内行動の態様をモデル化した的確に示し、それらの結果を普遍化して導いた論の展開は計画論として高く評価できるものである。

本研究の成果は、図書館の平面計画、特に児童部門の配置の在り方および平面構成に関する具体的な計画・設計を進めるうえで、新しい有効な知見およびデータを提示するものであるとともに、図書館計画の論考として内容は極めて優れたものである。これによって公共図書館のスペースの構成を構造的に理解できるようにしたといえ、その意義は大きい。

本研究は、家族の同伴利用からみた館内行動のモデル化を中心としたものであり、その点に関して大きな成果を得ているが、次の課題として、図書館本来の利用目的である資料、情報の利用との関係で館内行動を分析することがあげられ、今後の展開を期待したい。

以上の結果から、本論文は博士論文として十分な水準に達していると判定する。

よって、著者は博士（デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。